

(社) 東洋音楽学会関西支部

支部だより

第16号(1993-5-25)

Newsletter of the Kansai Chapter, Society for Research in Asiatic Music

### 定例研究会のご案内

(社) 東洋音楽学会関西支部 第164回定例研究会

(情報処理学会音楽情報科学研究会と合同)

と き 1993年6月12日(土) 13:30-16:50

ところ 国立民族学博物館2F第5セミナー室

大阪府吹田市千里万博公園10-1 ☎06-876-2151

交通 1. 北大阪急行「千里中央駅」または阪急「南茨木駅」にてモノレール乗換  
「万博記念公園」下車徒歩15分(自然文化園通り抜けに150円必要)  
2. JR茨木駅より阪急バスまたは近鉄バス「エキスポランド行き」にて  
「日本庭園」下車徒歩15分(バスは1時間に2本のみ)

\*建物北側の通用口から守衛さんに東洋音楽学会会員であることを告げてお入りください。正面からお入りになりますと一般来館者並に入館料が必要となりますのでご注意ください。

#### 【研究発表】

1. 『国立民族学博物館における音響データベース』

中川隆、鈴木明、杉田繁治(国立民族学博物館)

2. 『長唄において三味線の音色はどのように弾き分けられているか?—小十郎譜を例にとった場合—』

矢向正人(九州芸術工科大学)

3. 『日本音楽の情報処理—尺八の場合—』

志村哲(大阪芸術大学)、坪井邦明(浜松職業能力開発短期大学)、

松島俊明(東邦大学)

司会: 渡辺浩子ほか 会場: 中原ゆかり

(社) 東洋音楽学会関西支部 第165回定例研究会

と き 1993年9月18日(土) 14:00-16:30

ところ 大阪音楽大学水川記念館

豊中市名神口1-4-1 ☎06-865-0545

交通 阪急宝塚線庄内駅東側より阪急バス22系統「上津島」下車

#### 【連続講座】

〈音の今昔〉

『20世紀初頭の録音が現代に訴えるもの』

山口修(大阪大学)

\*上記の他に研究発表または研究演奏を予定しています。

\*本定例研究会の未定部分の内容詳細は、追ってご案内いたします。

唐時代(618-907)の中国は隣国の日本に、文化、制度、宮廷行事などの広い領域にわたって影響を及ぼした。その中に音楽文化も当然含まれている。しかし、当時の両国における文化、民族の習性および社会発展程度に差があるので、それに応じて、文化の受容の程度及びその内容にも差がある。したがって中国文化をすべてそのまま輸入したのではないことが十分想像できるのである。それでは、古代日本は中国の音楽をどのように受容したのか。言い換えると、日本に輸入されたとき、どの程度に受容され、どのように変容したのかということについて明らかにする必要があると思う。ここで主に奈良、平安時代に出現した日本の宮廷音楽「女楽」を取りあげて両国におけるその実態を調査し、比較検討してみようと思う。

春秋戦国時代から唐時代まで「女楽」は女の演奏者、つまり人間を指すものであり、音楽のジャンルとしての意味は含まれていなかった。また、貴族階級の人びとは「女楽」を財産として擁し、大臣と皇帝の間の献上ないし下賜されるべきものとしても用いた。しかし、宮廷儀式音楽としては認められていなかったのである。

一方、日本の古代における「女楽」は音楽ジャンルとして三つの宮廷行事、すなわち「白馬節会」「内宴」「重陽節」に用いられた。もともと中国から輸入されたものであるが、日本に伝わってから本来の中国の「女楽」の娯楽性ないし淫楽という性格および儀式音楽と無関係であるという特徴が、日本の宮廷においては無視され、単に「女楽」という名称および唐宮廷で演じられた曲名だけが、平安後期に受容されたい。従って、それは自分の文化によって、外来文化を解釈し直す受容の仕方であると言える。つまり、外来文化はハードウェアとして宮廷の文化に取り入れられはしたものの、その実体、いわゆるソフトウェアの面では日本的なものに変えられたのである。

## 第165回定期研究会連続講演「音の今昔」要旨

20世紀初頭の録音が現代に訴えるもの

山口 修

近代的な「録音」技術が生まれてから約1世紀の時間が経過した。その間のテクノロジーの開発は著しい展開を示し、それぞれの段階に応じてさまざまなかたちで人類の音楽文化にインパクトをあたえてきた。その全容を探りつつ「音楽学における録音の意義とその活用方法」を真剣に考察すべき時機に、私たちは直面している。

すでに私は「演奏」そのものが歴史学的方法による音楽研究に役立てられるべき資料すなわち「史料」として位置づけられ活用されるべきであることを主張してきた(たとえば YAMAGUTI Osamu "Performance as a historical source in music research", TOKUMARU Yoshihiko et al. (eds.), *Tradition and its future in music: report of SIMS 1990 ŌSAKA*, Tōkyō & Ōsaka: Mita Press, 1991:153-157)。それは、私たちが直接立ち会うことのできる現代人による演奏さえも過去を映す資料と捉えるべきであることをも含んだ一般論として提示したものであったが、同時に今回問題にするような録音資料も射程に入れていた。ただし実際には、具体的にどのような史料(資料)批判がなされるべきかといった方法論的考察を充分に加えるには至っておらず、若干の具体的処理をほどこしかけているにすぎない。このような問題意識と反省に立って、私の専門とするミクロネシアを事例にして、この領域での研究が一步でも前進するよう何かしらの報告を今回おこないたいと思っている。

幸いにして、本年6月後半にベルリンで開かれる第32回ICTM世界大会の終了後、オセアニア関係者がダーレムの民族学博物館で分科会(study group)の活動をおこなうことになっており、博物館に保管されている20世紀初頭のドイツ人探検隊による収集品(録音を含む)が討論の対象のひとつとなる可能性がある。私自身以前にこの博物館を訪れたときにミクロネシア関係の蠟管録音テープ変換資料を入手したことがあるので、この方面での一連の動きを中心にして報告する予定である。

◇情報処理学会との合同例会によせて◇

志村 哲

今回の合同例会について、両学会に籍をおくものとして簡単に趣旨を述べさせていただきます。

ここ10年くらいの間に自然科学や工学系の各分野において、音楽をテーマとした研究会がいくつか発足しました。また、正式名称として「音楽」を掲げていなくても、多くの学会において音楽に関わる話題の研究発表のセッションがもたれています。このようななか、音楽情報科学研究会は、「音楽の情報処理」に関する議論と情報交換をおこなう場として1985年に活動を開始しました。

近年、急速なコンピュータの発達にともなって、多くの新しい音楽情報処理技術の開発や応用研究がおこなわれています。たとえば、楽譜の編集・印刷・演奏、音の分析・合成ほか、ごく最近では、文字、図、音、映像などのメディアを統合的に、かつ統一されたコンセプトで扱うハイパーメディア・データベースの開発など多方面にわたります。現在これらの成果の多くは、情報処理学会で報告されていますが、音楽の専門家からみると扱う資料や課題の設定に、音楽的側面からの吟味が不十分であるものもみうけられます。また、音楽学の領域においても、パーソナルコンピュータがいくつかの作業に活用されるようになりましたが、まだその内容や技術・方法論は、情報科学の専門家からみれば、現在あるコンピュータの能力を充分生かしたものであるとはいえないと考えられます。

しかし、これら両分野の研究者が、お互いの成果や問題を持ち寄って一同に会し、議論することはそう簡単なことではありません。研究の目的が異なるという以前に、まず、それぞれが使用する用語が異なることの障害をのりこえなければなりません。それでも、お互いの配慮をもってさまざまな側面からひとつのテーマを考えていくことにより、問題解決の糸口を得ることができたり、あるいは新しい技術・方法論を手にしたたり、学際的なプロジェクトが生まれることがあれば、たいへん有意義なことであると思われれます。

◇沖縄だより◇

蒲生美津子

沖縄はそろそろ梅雨入りの時期で、おしめりが少しずつ感じられるこの頃です。大会の開かれる12月は、本土ではもう冬寒なので、来沖の方がたにはぜひ沖縄の温かさ、爽やかさを味わっていただきたいものと願っています。

ところで大会第1日(12/3、金)に計画した芸能鑑賞会は、若手芸能者を育てる目的で月初めの火曜日にやっている県主催の公演会を、金曜日に設定したものです。比嘉悦子さんの尽力で、会場を押さえるところまではできましたが、いま沖縄は天皇来沖での植樹祭一色で、県の文化課は、芸能どころではないとのこと。鑑賞会の内容を、県の方針に沿ってやるか、あるいは学会のほうから物言いができるのかなど、内容を煮つめることについてはもう少し時間がかかりそうです。

研究発表、講演、シンポジウムなど会員の多数の積極的参加によって、充実したものになるよう、いまは研究発表の申込みを、大いに期待しています。機関誌には大会での発表の質疑応答を掲載するよう望んでおりますが、久万田さんなどは、基調講演やシンポジウム、沖縄関係の研究については、テープおこしをして、ちゃんとした冊子の形でも残したいと張り切っています。

大会日程の最終日は、帰本土組と沖縄残留組を予想して、いつもの大会より早い2時40分に終わります。夕方は時間が許すかぎり首里城の解説付き見学へどうぞ、首里の井戸、御森めぐりをどうぞというように、普通のツアーでは見えない首里ハイキングを考えています。首里城の石段はとても急ですし、首里の道路は坂道が多くしかもデコボコです。せいぜいオミザシのほうの健康管理を怠りませんように。

(1993 / 4 / 23 受信)

▽編集後記

- \* 第164回定例研究会は情報処理学会の分科会、音楽情報科学研究会と共催です。  
これに関連して、現在、音楽情報科学研究会幹事で、東洋音楽学会地区委員もされている志村哲さんに「合同例会によせて」と題してご寄稿いただきました。
- \* 1993年度東洋音楽学会全国大会は、来る12月3日(金) - 5日(日) 沖縄県立芸術大学を主会場として、開催されます。  
これを機会に、理事の浦生美津子さんより、「沖縄だより」を寄稿していただきました。

▽今後の定例研究会開催予定(会場は未定)

- 第166回 1993年11月(または12月)  
第167回 1994年2月  
第168回 1994年4月  
第169回 1994年6月  
第170回 1994年9月  
第171回 1994年11月

定例研究会での発表等を常時募集しています。ふるってご応募ください。

\* 申込方法

連続講座、発表の種別(研究発表・調査報告・資料紹介・研究演奏など)、発表題目、使用希望機器、希望日、所属、氏名、連絡先を明記の上、下記宛ご送付ください。なお、申込多数の場合など、必ずしもご希望に添えないこともありますので、あらかじめご了承ください。

定例研究会のお問い合わせ

〒673-14 兵庫県加東郡社町下久米942-1 兵庫教育大学 水野信男  
Tel. 0795-44-1101内線521  
Fax. 0795-44-0669(水野宛と明記)

〒860 熊本市黒髪2-40-1 熊本大学文学部地域科学科 櫻井哲男  
Tel. 096-344-2111内線2469  
Fax. 096-366-6957(宿舎)

(ご注意! 4月より櫻井理事の勤務先が変更になっています。)

住所変更等連絡先

〒560 豊中市待兼山町1-1 大阪大学文学部美学科 山口研究室 気付  
(社) 東洋音楽学会関西支部 \* 葉書にてご連絡をお願いいたします。

発行: (社) 東洋音楽学会関西支部

〒560 豊中市待兼山町1-1 大阪大学文学部美学科 山口研究室 気付

~~TEL. 06-844-1131内線520~~

~~FAX. 06-844-1135~~